

# モンゴル語近代語彙登場の母体——『蒙話報』誌(四)

——内モンゴル自治区図書館蔵残本二冊と

吉林省档案館蔵『蒙文報』誌——

フフバートル

## はじめに

1995年の夏、筆者が内モンゴル自治区図書館で確認できた『蒙話報』誌は第二十五期のみだった。図書館員の厚意により書庫のなかで調べることができたが、結果は図書館カードの登録とほぼ一致していた(1)。実際、内モンゴル人民出版社から出た『蒙古学百科全書(新聞出版巻)』(2003年、モンゴル語)(2)に収められた『蒙話報』の写真も第二十五期のものであった。ところが、同『百科全書』の『蒙話報』誌の紹介には、この雑誌の「第二十七期」が参考資料にあがっていた(3)。そのために、筆者はそれを確認する目的で2005年8月に内モンゴル自治区図書館を再度訪れた。その時、第二十五期はどこか別のところにおいてあったのか、それとも貸し出されていたのか、あるべき位置には見当たらなかったが、そこにはその構成やスタイルからみて『蒙話報』の残本ではないかと判断される散逸した書籍が二冊おいてあった。それはカードからも調べられるものなのか、不明だったが、今回も十年前に世話になった図書館員の案内で書庫のなかを見ることができた。わたしは、「第二十七期」とは別の一冊が内モンゴル自治区図書館に所蔵されていたはずの第八期(後述)の残本であってほしかった。しかし、日本にもどってきて確認した結果、それは第八期ではなく、東洋文庫所蔵とは異なる形の第七期の残本であることがわかった。

この二冊については以下の小見出しで記述していきたいが、これら内モンゴル自治区図書館所蔵『蒙話報』の各期について、その裏の情報を流しているのが同図書館研究員トゥィメル(忒莫勒)氏の『『蒙話報』研究』という論文である(4)。筆者がこの論文の存在を知ったのは本稿を書くにあたり、インターネットで調べた結果であった。別の論文でも触れているが、トゥィメル氏は中国領内で出版されたモンゴル語定期刊行物の研究者として知られ、1987年に出た内蒙古自治区図書館編『建国前内蒙古地方報刊考録』(内蒙古自治区図書館叢書 一)の事実上の著者である。氏の『『蒙話報』研究』という論文は、中国で見られる同誌第二十五期と上記残本二冊及びG. デレグ氏の研究(5)と内モンゴル大学のトゥグスチョグト氏などの著書(6)を参考に書かれたという、一次資料に恵まれない状況での執筆であったが、諸事項の記述が詳細で、同誌に対する論評も内モンゴル近代史の専門家としてのトゥィメル氏ならではの基本姿勢が明瞭で、より客観的であると受け止められる。

ここでは、トゥィメル氏の記述を参照しながら、内モンゴル自治区図書館蔵『蒙話報』誌の残本二冊及び吉林省档案館蔵『蒙文報』誌について分析することにした。

## 一、第七期の写本

東洋文庫蔵『蒙話報』の第七期は62ページで構成されているが、内モンゴル自治区図書館蔵残本は、東洋文庫蔵『蒙話報』の第七期に掲載されている2ページから37ページ第8行までの内容を30枚に収

めており、Qar-a tamiki uuvuqu-yi čavajilaqu bičing（アヘンを吸うことを禁ずる書）という一行文字による表紙が付けられている。表紙の内容からは一見単行本のように見えるが、実際はそれが最初の一部の内容にすぎず、あとは『蒙話報』第七期各欄の内容が写されている。一ページにおける行数も蒙漢対照の14行からなり、これも『蒙話報』の正式な出版物と同じである。『蒙話報』の正式な出版物は縦が約20cmであるのに対し、この毛筆の写本は約25cmで、横は正式な出版物とほとんど変わらず約13cmである。したがって、正式な出版物に比べて、この写本は縦に長い。最初のページから始まったQar-a damav-a uuvuqu-yi čavajilaqu degedü jarliv（禁食鴉片的上諭）は、一行に収まった文字数も文字の書き方も東洋文庫蔵『蒙話報』の第七期とは異なるものであったが、それ以降の「論叢」欄からは、一行内に収まる文字も同じように写しはじめていたものの途中からずれたしている。

この残本が写本であると判断される理由としては次の二点が挙げられる。まず、漢語で「毛頭紙」（繊維が太くて質の柔らかい白い紙=小学館『中日辞典』）と呼ばれる紙に筆で写され、モンゴル文字も漢字も書き方がぞんざいであること、そして、『蒙話報』の正式な出版物では、「論叢」、「奏牘」、「時事要聞」など各欄の名称にそれぞれ一ページを割いてそれをモンゴル文字と漢字で大きく筆で書いてあるが、内モンゴル自治区図書館蔵第七期のばあいには、それがそれぞれ一行（蒙漢文並行で二行）からなり、本文の文字より若干大きく書かれただけである（資料一参照）。

このように、内モンゴル自治区図書館蔵第七期の存在は、『蒙話報』雑誌には正式な出版物以外にも手写しのものが伝わっていたことを意味し、この雑誌の出版状況や読者のニーズを知るうえで貴重な資料になる。

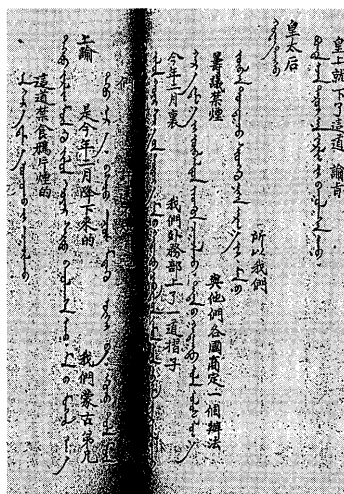
1999年に北京図書館出版社から出た『中国蒙古文古籍総目』には、この第七期の所蔵が記され、モンゴル語で「No. 7（写し、残本）」と書かれ、所蔵機関が015001（内モンゴル自治区図書館）とある（7）。この記述は、この『総目』の編集で学術顧問を務めたトゥィメル氏の指示によるもので、それを第七期の残本と判断した理由として、トゥィメル氏は「聖諭廣訓」欄に「継第六期」と書いてあったことを挙げている（8）が、その判断は正しかった。

最後になるが、この手写し残本は、上記『中国蒙古文古籍総目』を編集した際に、トゥィメル氏が内モンゴル自治区図書館の未整理のモンゴル語残本のなかから見つけ出したものであった（9）。

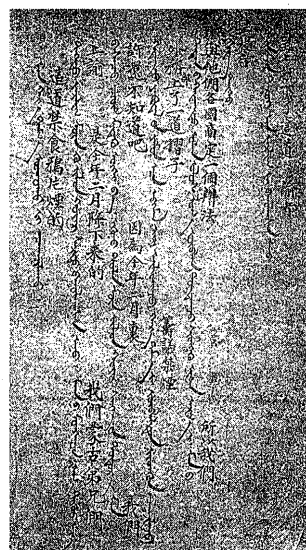
資料一

東洋文庫蔵『蒙話報』  
第七期 (A) と内モンゴル  
自治区図書館蔵『蒙話報』  
第七期 (B) との比較

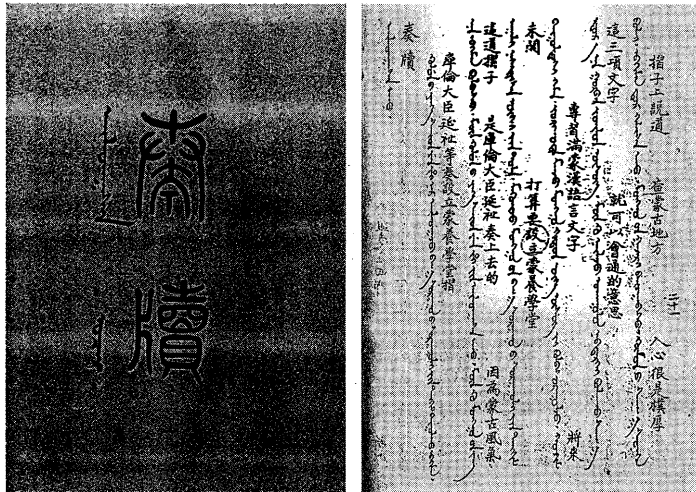
A



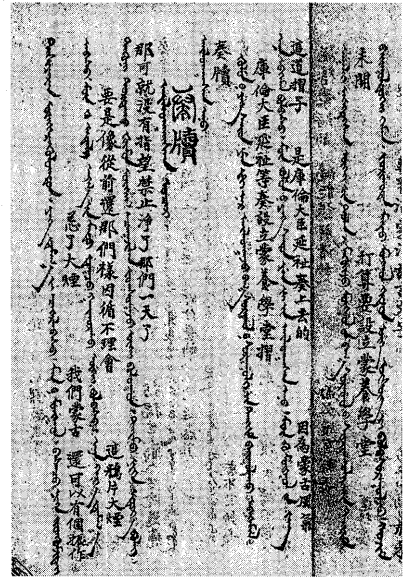
B



A



B



## 二、第二十七期

前述のように、『蒙古学百科全書（新聞出版巻）』（2003年）の『蒙話報』誌の紹介ではその参考資料にこの雑誌の「第二十七期」があがっている。これについて、トゥィメル氏は上記の論文で次のように説明している。

今年（2001）2月、わたしはわが館（内モンゴル自治区図書館）蒙文部（モンゴル語部）の未整理散逸書のなかから一冊の残本を見つけた。それは私自身の要望による調査であった。サイズが22.2×12cmで、第二十五期に比べてやや小さい。前後から散逸し、始まりが「論旨恭録」欄の6ページ（5ページから=引用者）からである（後略）。

後ろから散逸した部分については触れていないが、この残本には「附録」欄はなく、したがって、「本報特色」という最後のページはない。「附録」欄の前にある「雜俎」欄には Činu-a qoni-i bariqu anu（狼撲羊）という物語が一つあるが、前の諸期の「雜俎」欄には物語がだいたい二つ載っているので、これで「雜俎」欄が完全であったかどうかはわからない。

前後から散逸したこの残本が『蒙話報』誌の第二十七期であったと判断された理由について、トゥィメル氏は、「淺近學說」欄に掲載された「農学」の連載が「第十三節」になっていることを挙げている<sup>(10)</sup>。というのは、第二十五期ではそれが「第十節」と「第十一節」だったので、第二十五期が利用できる状況においてそれはしやすい判断であった。つまり、「第十二節」が第二十六期に掲載され、次いで「第十三節」が掲載されたのが第二十七期になるという計算である。何かの特別な理由があって連載が中断されない限り、これはあまり無理のない判断であり、これ以上有効な判断材料をこの残本から見つけ出すのも難しいことである。

氏はさらに、「時事要聞」欄から特定の記事の内容を引き出し、その発生年月からこの期の発行年月を考察している。その結果、第二十七期の刊行を宣統3年（1911）5月だと推定している<sup>(11)</sup>。この第二十七期に「宣統三年二月初二日」の奉書が掲載されている<sup>(12)</sup>ので、この推定はあまりはずれていないと思う。

『蒙話報』誌は、光緒34年（1908）4月15日に第一期が刊行され、それに続き、宣統元年（1909）7月に発行された第十四期までは各期にその期の発行年月が付いていた。それが第十五期からは発行年は付くものの月が付かなくなった。その理由はおそらくその時からそれまでのように予定通りの刊行ができなくなったからであろう。もし、それまでのように毎月15日にきちんと刊行できていたなら、第二十七期の出版年月を調べるのも簡単なことで、第二十五期の発行年月の翌々月であるとみてよかつたはずだ。しかし、第二十五期の表紙には「宣統二年 第二十五期」としか記されておらず、「毎月一回発行」というモンゴル語やマンジュ（満洲）語の語順で書かれた漢語の表記はそれまでどおり付いている。

もし『蒙話報』誌が第十四期以降も毎月発行されていたなら、第二十七期は宣統2年9月に発行されていたことになる。しかし、第十七期が宣統元年の最後期で、第十八期が宣統2年の最初期になっているので、第十八期を宣統2年1月発行だと考えて、その後毎月1期が発行されたと計算するなら、第二十七期は宣統2年10月の発行になるのだが、トゥィメル氏の判断通り、第二十七期の刊行を宣統3年（1911）5月だとすれば、第十八期から第二十七期までの10期の発行には約1年5ヵ月（17ヵ月）かかったことになり、その間は、「毎月一回発行」は守られず、1期の刊行に平均1.7ヵ月かかったことになる。

ところが、『蒙話報』誌についてはもう一つ興味深い情報がある。

2004年に上海図書館から出た『上海図書館蔵近代現代中文期刊総目』に次のような記述が載っている（13）。

蒙話報No.1 [19??] -No.33 (民国2年) [1913] 吉林 出版者不詳 [19??] —1913. No.33, 挿図23cm、月刊、中蒙文対照。館蔵: No.33 (1913)

この『総目』は新しいだけに注目に値する。しかし、上海図書館では筆者が1995年8月に一日かけて古いモンゴル語の定期刊行物だけを調べた経緯があり、カードから調べた分には漏れがなかったはずだと確信していた。

いずれにせよ、第三十三期が所蔵されているということは、この雑誌の廃刊期を考える上で有益な情報であり、また、それが1913年発行という記述も、同誌の第二十七期以降の発行年代を推測するうえで参考になる。

中国の図書館の資料は管理体制や利用体制が行き届いていないため、実際に在庫のものが登録されていないか、登録されているものを利用できなかったりするような事情があるが、最近になってコンピューター検索システムの導入などで図書館が再整備されていることもあるので、古い資料についても新しいカタログには目を通している必要がある。同時に、資料の紛失も多いので、その紛失年代を確認するには古いカタログが参考になる。

ということで、現時点では世界のどこの蔵書館からも確認できなくなっている本誌の第八期について少し触れておきたい。「世界の」と言っても本誌の所蔵にかかわっている、または所蔵の可能性のある蔵書機関としては日本の東洋文庫と中国の内モンゴル自治区図書館以外に、ロシアのサンクトペテルブルグの東洋研究所図書館やドイツのボン大学中央アジア言語文化研究所の資料室などが挙げられる。ボン大学所蔵の古いモンゴル語定期刊行物は、故 W. Heissig 教授が1940年代前半に内モンゴル東部から集めたものがほとんどである。1998年11月に筆者はドイツでそれを調べ、中国や日本では

所蔵が確認されていないモンゴル語の古い新聞、雑誌数種類を2,000枚ほど複写してきた。そこでは『蒙話報』誌は見つからなかった。サンクトペテルブルグの東洋研究所図書館における本誌、特に第八期の事情についてはすでに述べている(14)。

トゥィメル氏の上記論文によれば、内モンゴル図書館に第八期が所蔵されていたという情報は、『全国蒙文古旧図書資料聯合目録』(1979年)(15)によるもので、1986年に氏が前記『建国前内蒙古地方報刊考録』を執筆していた時はすでに同図書館蒙文部では見つからず、今に至っても消息がないままであるという。『全国蒙文古旧図書資料聯合目録』には『蒙話報』について、「光緒34年(1908)刊行第八期391(内蒙古自治区図書館)」とモンゴル語で書いてあるが、同図書館所蔵の第二十五期のことは記述されていない(16)。しかし、トゥィメル氏は、第八期が同図書館にもどってくることへの期待を込めてか、『建国前内蒙古地方報刊考録』にその記述を止め、さらに、それまでに記述がなかった第二十五期の存在を記しておいた。それが現在中国国内で確認できる唯一比較的完全な形で所蔵されている『蒙話報』誌である。しかし、第八期はもどってくることはなく、新しく編集された『中国蒙古古文古籍総目』(1999年)の登録からは外されている(17)。

## 資料二

### **Girin muji-yin mongyul üge-yin bodurul qorin doluy-a uday-a-yin quriyangvui juil** 吉林蒙話報第二十七期目録 (第二十五期目録に基づいて作成=記述者)

論旨恭録 (5ページから=記述者)

Boyda-yin suryal-i badaravuluvsan anu 聖諭廣訓

Tabudubar angyi arbilaqu quravaqui-yi erkimlejü ed-ün kereglegün-i qayiralaqui anu  
第五條 尙節儉以惜財用

Erten-ü yabudal 歷史

Tümen ulus-un oyiraki üy-e-yin yabudal 萬國近世史

Lü si ya-u manduvsan jiči bi te yeke di 露西亞之興及彼得大帝

Olan jüil-i kelelčivsen anu 論叢

Kelejü seregekü 說醒

Ayiladvavsan uçar 奏牘

Irgen-ü jasav-un yabudal-un yamun-a toduraqayilan ayiladvaju sidgekü eng ebedčün-i  
sergeyilekü uçar yabudal-un ebkimel 民政部奏臚陳辦理防疫情形摺

Čav-un uçar-un čivula sonusval 時事要聞

Mongvul-un vadavadu qolbuvsadaqu anu 蒙古外交

Mongvul-un čivula jasav-i kičiyekü anu 圖蒙要政

Mongvul-i dayičilan bayičavaqu urida čimege anu 調查蒙古之先聲

Mongvul kümün-ü darulavdaqu anu 蒙古人之受欺

Mongvul-un sin-e kijavar-un oyirča kemekü buyu 蒙古新疆之近況

Güyüken oyir suryal-i kelelčigsen anu 淺近學說

Tariyan-u surtal 農學 arban vurbadubar bülüg ayimav-un köbüng 第十三節 洋棉

Girin muji-yin mōn sarayin doturaki mōnggū amu-u ün-e-yi üjigülkü nigen

qavudasu 吉林省城本月内銀糧市價一覽表

Eldeb yavum-a-u jüil 雜俎

Činu-a qoni-i bariqu anu 狼撲羊

### 三、『蒙文報』誌

この雑誌について、筆者は「モンゴル語近代語彙登場の母体——『蒙話報』誌（一）」でも触れ、『蒙話報』誌研究の一環である」と位置づけた(18)。

初期モンゴル語定期刊行物の最も本格的な出版物である『蒙話報』雑誌が吉林省で発行されていたことは上に見てきた通りである。その後も、吉林からは数種類のモンゴル語定期刊行物が発行された。それは1932年の満州国の建国により内モンゴルの東部がその領土内に入っていたため、当時満州国の首都だった吉林省の長春市で発行されていたものであった。しかし、満州国時代のモンゴル語定期刊行物とは異なる『吉林蒙文報』というモンゴル語雑誌が吉林省档案馆に所蔵されているという情報を得て筆者は、1996年3月に内モンゴル東部での研究調査の帰りに同档案馆を訪れた。

カードからこの雑誌の登録を見つけた時はいつものように実物の確認ができるかどうか不安であった。図書館とは異なり、档案馆では資料は確実に見つかった。改革開放と市場経済が進む中国では档案馆も基本的に公開され、そこに所蔵されている資料が収入源になるようになっていく。同誌のコピーは一枚につき10円で計算され、その一冊の「保護費」は中国人の当時の平均給料の2ヵ月分に相当する700元となった。そしてそれが原本ではなく複写であることを意味する紅色の「吉档 複製件」という印をコピーの各ページに押された。それは事実上「版權所有」を意味する検印であった。

前の論文でも述べているように、この雑誌の前の表紙には「蒙文報」と「第貳百零貳期」と書いてあるだけで、後ろのページも取れているため、発行年代も発行機関も記されていないが、各欄の構成と雑誌自体のスタイルは『蒙話報』に酷似している。表紙は「蒙文報」であるが、目録のページでは「吉林蒙文報目録」となっている。これも『蒙話報』のばあいとまったく同じである。『蒙話報』の目録はかならず「吉林蒙話報第～期目録」であるが、この『蒙文報』のばあいは「第～期」が記されていない(資料四参照)。

また、「目録」という単語のモンゴル語訳は、民国以降に創刊された『蒙文白話報』や『蒙文報』(本稿の対象である『蒙文報』とは別の雑誌)などでは *sedüb* になっているが、この『蒙文報』では『蒙話報』のばあいの *quriyangvui* に *des* が付けられた形で、*quriyangvui des* である。現在のモンゴル語では、*sedüb* は「題」を意味し、*quriyangvui* は「まとまっている、総括的」といった意味の形容詞で、*des* は「順序」の意味で使われる。『蒙話報』が『蒙文報』になったのは、雑誌は文字によるメディアなので、「話」よりも「文」の方が適切だという考えによる訂正であろう。それに、目録に見られるこの雑誌のモンゴル語名称は、*Girin-ü mongvul üsüg-ün sedgöl* で、定期刊行物を意味する「報」に当たるモンゴル語は、『蒙話報』のばあいの *bodurul* ではなく、*sedgöl* となっている。定期刊行物の名称として *sedgöl* が使われはじめたのは民国になってからである(19)。『蒙話報』が『蒙文報』になったのとは直接関係がないと思うが、『蒙文報』が『蒙話報』の継続であったとすれば、そのモンゴル語名称の *bodurul* が *sedgöl* になったのはいつからであろう。民国時代になってから変わったかどうかは、前記のように、もし上海図書館に『蒙話報』の第三十三期(1913)があると

すれば、まずそれが参考になる。

この雑誌の発行年月については掲載された記事の内容から判断せざるをえない。その有効な判断材料になるうる記事としてはまず、「命令」欄の「茲制定中華民國軍政府組織令公布之此令」がある（資料三を参照）。

「中華民國軍政府組織令」は1927年6月18日に公布され、これには「大元帥総攬陸海軍権（後略）」となっている<sup>(20)</sup>が、本誌「新聞」欄の最初に掲載されている「張上將軍就任大元帥」、つまり、張作霖が大元帥に就任したことについての記事であるが、それによれば、五月十八日午後三時二十分張作霖が懷仁堂で中華民國陸海軍大元帥の職についたということである<sup>(21)</sup>。張作霖は1926年12月に安国軍総司令に就任し、翌年6月に「共同拥戴」の方式により安国軍大元帥、つまり、陸海軍大元帥に改められ、軍政府を樹立し、新内閣を任命した<sup>(22)</sup>。ここでは記事の日付とは月の違いが生じているが、前者が陰暦を使っているのに対し、後者が陽暦を使っているからであろう。

次も「命令」欄の内容で、大總統から蒙藏院総裁グンセンノロブ（貢桑諾爾布）に当てた指令である。グンセンノロブが蒙藏院総裁を退位したのは1928年の何月であったのか、詳しい資料が見当たらないが、いずれにせよ、1927年にも国民政府は南京で蒙藏委員会設立を計画準備し、1928年1月には張繼、白雲梯（ボヤンタイ）など七名の蒙藏委員会委員を任命している<sup>(23)</sup>ので、グンセンノロブが総裁を務めていた蒙藏院自体はその後あまり長く存続しなかったのであろう。

したがって、この『蒙文報』雑誌の「第弍百零弍期」は1927年後半から1928年の前半に刊行されたものとみてよかろう。

このように、もしこの『蒙文報』が何らかの意味で『蒙話報』の続きであったとすれば、『蒙話報』誌はすくなくとも1920年代末期まで発行されていたことになる。しかし、このばあい、『蒙話報』誌の創刊年代（1908）から計算して約20年経って「第弍百零弍期」（第102期）というのは、月刊誌としてはまったく計算が合わなくなるので、上にもみたように刊行が予定通りに行われなかったか、あるいは暫く停刊していた可能性がつよい。

最後になるが、トゥィメル氏も上記の論文でこの『蒙文報』の存在について論じている。発行年代についての氏の推測は筆者の結論と異なるものの、この雑誌が『蒙話報』を継続するものであろうという考えは筆者と一致している<sup>(24)</sup>。

### 資料三

#### Girin-ü mongyul üsüyg-ün sedgöl-ün quriyanggvi des 吉林蒙文報目錄

##### Ĵakiy-a ĵarlal 命令

Yeke yüwenshüwai-yin ĵarlal 大元帥令

Edüge dürimlen tovtavaysan dumdadu irgen ulus-un čireg-ün saĵav-un fü-i gürün bayivulqu ĵarlal-i yerüngkeilen tarqavatuvai egünü tula ĵarlabai kemeĵüküi

茲制定中華民國軍政府組織令公布之此令

Yeke züngtüng-ün ĵarlal (nökügsen anu) Mongyul töbed-ün ĵurvan-u züngtsai güngsengnorbu-du ĵarlaysan anu 大總統指令（補）令蒙藏院總裁貢桑諾爾布

##### Üge ügülel 言論

Ug ulus-ača urbavsan ongvuča-u kümün öbesüben tegün-ü ongvuča-i nükülekü anu  
叛祖國猶舟人自穴其舟

Alban bičig 文件

Girin-ü mongvul ködege-i degešülen talbiqu-i jasan jalaravuluvsan kemjij-e dürim anu  
吉林勘放蒙荒修正章程 (三十三條 原文にはこの漢語表記はついていない=記者)

Sin-e sonusval 新聞

Ĵang shang ĵangjün yeke yüwanshüwai-yin tusiyal-i küliyegsen anu  
張上將軍就任大元帥

Pan dotuyadu ordun-u tüsimel anu 藩內閣之閣員

Ĵadavadu mongvul čireg anggi hólün boyir-i debčiskin buliyaqu anu  
外蒙軍隊侵掠呼倫貝爾

Ĵadavadu mongvul-ača egejü iregsen jočid-un kelelčige anu  
外蒙歸客談

Ünen körüngge 實業

Urbavulun tariqu-i qorivlaqu anu 勸耕

Eldeb jüil 雜俎

Dumdadu irgen ulus-un tov-a-u edür (qoyar) 中華民國的紀念日 (二)

(Tabun) Yavun-i ulus-un qural kememüi (五) 什麼是國會

(Ĵirvuvan) Ejen-ü dürim-i ug yosuvar bolvaqu-i yabuvdaqu ba qamtu nayiramdaqu-i dakin  
üiledkü luv-a (六) 復辟運動與再造共和

(Doluvan) Eü jeü-yin bayilduvan dumdadu ulus luv-a (七) 歐战和中國

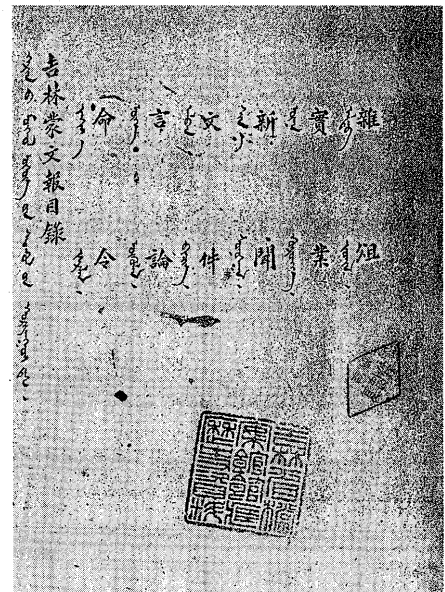
(Nayiman) Quwangdi-yin dürim-dü yabuvdaqu qamtu nayiramdaqu-i sitün ergükü anu  
(八) 帝制運動和擁護共和

資料四

吉林省档案館藏

『蒙文報』「第貳百零二期」より

以下の小見出しの内、  
28頁掲載の「言論/言論出版」および29頁掲載の「新聞」に重複が見られるが、前者は左右の「言論出版」「言論」が、後者は右の「新聞」が後に書き加えられたと考えられる。





# 命令

治權  
 第一條 陸海軍大元帥統率中華民國陸海軍  
 茲制定中華民國軍政府組織令公布之此令  
 大元帥令

# 言論

人民生於國  
 國存在人民與之  
 廢沒 斷未有船已廢沒  
 船安全 船中的人也安全  
 一樣 人民生於國中 猶如人坐在船中  
 務語 這兩句語話的意思 就是說國如船  
 叛祖國猶如人自穴其舟 是春西的兩句  
 言 論

# 文件

第二條 勸放區域以來至查拉吐蓮花泡  
 設官治理  
 農安長嶺子縣業荒擇要勸放  
 漢蒙地方治安起見  
 第一條 省政府為清除西北沿邊匪患  
 第一章 總綱  
 吉林勸放業荒修正章程  
 文件

# 新聞

特留孫傳芳在京盤桓一日  
 孫傳芳在京盤桓一日，於五月十八日下午三時二十分在  
 考處中 張宗昌見 張上將態度未決  
 大元帥當就職前一日晚九時 尚在  
 懷仁堂就職 張作霖對於  
 元帥 孫傳芳在京盤桓一日，於五月十八日下午三時二十分在  
 女國軍諸將領推戴張上將軍為中華民國陸海軍大  
 元帥 孫傳芳在京盤桓一日，於五月十八日下午三時二十分在  
 張上將軍就任大元帥

# 實業

國力的重要要素  
 所以歐美各國 他們將別  
 丁工商興盛的時代 現在歐美各國 都早已入  
 漸漸改為農耕 再漸漸進為工  
 都先從牧畜起首 以後  
 世界上不論那一民族 最初的生活  
 勤耕 實業

# 雜俎

國會的發展  
 所以有國會議會 這個國家的議會 稱做國會  
 大團體的職務 不是四萬萬人共同耕作的  
 也是四萬萬人集成的團體  
 中華民國 是漢滿蒙回藏五大民族的國家  
 中華民國的紀念日 (三)  
 中華民國的紀念日 (三)

## おわりに

本稿では、『蒙話報』誌の残本二冊と『蒙話報』の続きと見られる『蒙文報』誌「第弍百零弍期」について分析してきた。もし『蒙文報』が『蒙話報』の続き、つまり、『蒙話報』が『蒙文報』の前身であったとなれば、『蒙話報』は中国で刊行された最も古いモンゴル語の官報定期刊行物といえるだけでなく、清朝と民国時代にまたがって最も長期的に発行されてきたモンゴル語定期刊行物になる。ここでは四回にわたって本誌をモンゴル語定期刊行物の資料研究や紹介の視点からみてきたが、最近まで知られていなかった残本二冊をここで紹介したように、また、上海図書館にはその第三十三期があるという新しい情報が出ているように、中国の図書館の管理状況が改善されるにしたがって、本誌についての研究がさらに進むことも期待できると思う。

『蒙話報』誌についての研究は、今後内モンゴルの近代史研究の視点からその掲載内容を分析しても大いに成果が期待できると思うが、ここでは、本誌を「モンゴル語近代語彙登場の母体」と位置づけているように、五回目からは基本的にこの雑誌に登場してきたモンゴル語の近代語彙について分類し、分析していくことにする。

## 注

- (1) フフバートル「モンゴル語近代語彙登場の母体——『蒙話報』誌（一）——漢字語直訳から始まったモンゴル語語彙の近代化——」『学苑』775号 昭和女子大学近代文化研究所 2005年5月 4頁を参照されたい。
- (2) Mongyul sudulul-un nebterkei toli nayiravulqu jöblel. *Mongyul sudulul-un nebterkei toli (sonin medege keblel)*. Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a. 2003. 391頁.
- (3) 注(1)の4頁
- (4) 忒莫勒「『蒙話報』研究」『蒙古学信息』内蒙古社会科学院 2001年 No.3 23-27頁
- (5) G. Deleg. *Mongol togtmol khevelelin tuukhen temdeglel*. Ulaanbaatar. 1965.
- (6) Tegüsčövtu Wang šiu lang. *Mongyul sonin sedgöl-ün teüken toyimn*. Öbür mongyul-un yeke surva-yuliyin keblel-ün qoriy-a. 1999.
- (7) 『中国蒙古文古籍総目』編委会編『中国蒙古文古籍総目』(下)北京図書館出版社 1999年 2221頁
- (8) 注(4)の25頁
- (9) 同25頁
- (10) 同25頁
- (11) 同25頁
- (12) 吉林蒙務處編譯『蒙話報』第二十七期(内モンゴル自治区図書館蔵) 奏七(「奏牘」欄の7頁) 1911年5月?
- (13) 上海図書館編『上海図書館蔵近代現代中文期刊総目』 上海科学技術文献出版社 2004年 1061頁
- (14) 注(1)の4頁参照
- (15) 八省区蒙古語文工作協作小組辦公室編『全国蒙文古旧図書資料聯合目錄』 内蒙古人民出版社 1979年
- (16) 同432頁
- (17) 同注(7)
- (18) 注(1)の3頁参照

- (19) フフバートル「モンゴル語定期刊行物名称考」『日本モンゴル学会紀要』No.27 1996年 49頁参照
- (20) 倪正太 陳曉明著『中華民国職官辞典』黄山書社 1998年 17頁
- (21) 『蒙文報』(『吉林蒙文報』) 第一百零二期 (吉林省档案館蔵) 新一 (「新聞」欄1頁)
- (22) 同注 (20)
- (23) 蒙藏委員会編譯室『蒙藏委員会簡史』蒙藏委員会印刷所 1971年 13頁
- (24) 注 (4) の26頁

(フフバートル 総合教育センター)